

中学校音楽科における「音への気付き」から始まる音楽の学び

—新しい発想や価値の生まれる創作活動の実践を通して—

杉浦崇文

(静岡大学教育学部附属島田中学校)

Learning music in junior high school music classes starts with "awareness of sound"

-Through creative activities that generate new ideas and values-

Sugiura Takafumi

要旨

本研究は、中学校音楽科において「音への気付き」を出発点とした創作活動を通じて、生徒が音楽への理解と主体的な関わりを深める授業の在り方を探究するものである。現代の生徒は日常的に音楽に親しんでいるが、その関心は主に歌詞や背景といった具体的な要素に偏り、音そのものへの注目は乏しい実態が見られる。本研究では、中学3年生を対象に、音楽の素材や構造を出発点とし、新しい発想や価値を見出す「体系自体をつくる創作活動」を位置づけた。授業実践では、「音」と「音楽」の境界を探る活動から始まり、個人および小集団での創作を通じて、生徒が自らの音の価値を見出し、他者との協働により新たな音楽的世界を構築する過程を重視した。実践の結果、音楽に対する生徒の認識が拡張され、日常音を含む多様な音を音楽として捉えなおす姿が見られた。「体系自体を作る創作活動」が生徒の自己表現の幅を広げ、音楽への主体的な関与を促す手立てとして有効であることが示唆された。

キーワード：音への気付き 創作活動 音楽の定義 体系自体をつくる創作

1. 研究の目的と背景

中学生は日常的に J-POP や K-POP などの音楽を楽しんでいるが、楽曲に対する評価は「歌詞がよい」「〇〇が作った曲だから」といった言語的・外的要素に偏る傾向がある。音楽そのものの構造や音色への関心は低く、旋律やリズムを持たない非言語的音楽（いわゆる絶対音楽）への理解も十分とはいえない。この背景には、授業において「歌詞」や「標題」など具体的な要素に焦点を当てたアプローチが主流であり、音そのものに意識を向ける学習経験が不足している現状があると考えられる。

20 世紀後半以降の音楽教育では、作品の再現や理解にとどまらず、音そのものへの感受性を育てる教育的視点が重視されてきた。その代表的な実践の一つが、R. マリー・シェーファーによって提唱された「サウンド・エデュケーション」である。シェーファーは、音楽を特定の作品や様式に限定せ

ず、人間を取り巻く音環境全体に目を向け、日常の音に注意深く耳を傾ける態度の育成を教育の出発点とした。そこでは、環境音の聴取や音への気づきを通して、音に対する感覚的・身体的な関わりを深めることが重視されている（シェーファー、1992, pp. 1-20）。

このような考え方は、音楽を完成された「作品」としてではなく、「聴く」「感じる」といった行為の過程として捉え直す視点を提供するものであり、創作や鑑賞における学びの在り方を再構築する上で重要な示唆を与えている。

本研究では、こうしたシェーファーの思想を踏まえ、音楽科の学習内容を「音楽の素材としての音」および「音楽の構造」に着目することから出発し、新たな価値を見出す創作活動を通じて、生徒の主体的な学びを促す授業の構築を目的とする。

2. 理論的枠組と研究視点

本研究では、学習指導要領解説音楽編(2017, pp. 25-28)に示された指導内容の5観点—(1)音楽の素材としての音、(2)音楽の構造、(3)音楽によって喚起されるイメージや感情、(4)音楽の表現における技能、(5)音楽の背景となる文化や歴史など—のうち、(1)(2)を基盤とし、(3)(4)(5)への発展を促す構造を重視する。

題材「音から『そうぞう』しよう」では、学習指導要領のA表現(3)「ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、まとまりのある創作表現を工夫すること」「イ 音素材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴」「ウ 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組み合わせなどの技能を身に付けること」に基づいた授業展開を行った。また、[共通事項]「音楽を形づくっている要素」においては、「音色」「テクスチャ」「構成」を中心に据えた。

創作活動には、「既存の体系を用いてつくる創作」と「体系自体をつくる創作」があるとされている(清水, 2023, pp. 118-119)。前者は二部形式やABA形式など、既存の作曲技法を学んだ上でそれを模倣・応用して作品をつくる活動であり、評価もしやすい。一方、後者は構成そのものや音の組み合わせ方を試行錯誤する中で、音楽とは何かを再定義しながらつくりあげる創作であり、指導や評価が難しい側面もある。

しかし、後者の活動では、生徒自身が音楽的な「ルール」を発見し、音のもつ可能性を自由に探ることができる。そのため、既存の音楽観にとらわれず、むしろ「高い音が出ない」「音程が取れない」といった生徒の個性や困難さも、新たな価値として肯定的に捉える土台となり得る。

非線形的で秩序のない「ピュシス的」音楽の可能性を求める視点(坂本, 2023, pp. 52-54)をヒントに、音楽とされるものと音にとどまるものの境界を問い直すことが、本研究における創作活動の中心的な問いでもある。「音楽とは何か」を自分自身の身体感覚や日常の音に引き寄せて再構築する過程を通して、生徒が音を通して自己を見つめ、他者とつながる経験を提供したいと考えた。

以上のように、本研究では「体系自体をつくる創作」を軸に据え、音楽の素材と構造に着目しながら、生徒の感性・思考・創造力を統合的に育む視点をもって授業づくりを行った。

3. 授業実践の概要

本研究における実践では、「音への気付き」を出発点とし、音楽とは何かという根源的な問いに対する探究を軸とした題材「音から『そうぞう』しよう」を構成した。授業は、音楽の本質に迫るための問いと、その問いに対する見立てを生徒と共有しながら展開した。以下にその題材構成と各時の意図を示す。

題材貫く課題を「音楽とは何か」「音楽と音の違いはどこにあるのか」と設定し、この問いに対し、生徒自身が答えを見つけていく過程を大切に、知識や技能の獲得に加えて、音楽に対する見方・考え方を深めることを目的とした。

本題材の題材構成と学習活動の概要について以下にまとめた(表1)。

(表1) 題材構成

時	学習課題	学習活動の概要	生徒の思考の変容(想定)
第1時	音と音楽の境界を探ろう	J. ケージや坂本龍一などの実験音楽を鑑賞しながら、「これは音楽か?」という問いを立て、自分たちの「音楽の定義」を探究する。	「始まりと終わりがある」「繰り返しや意図があると音楽になるのでは」など、音楽を構造や意図からとらえる発想が生まれる。
第2時	自分の音楽を創ろう(個人)	身近な音素材を用いて、自らの定義に基づく音楽を構成する。始まり方や終わり方、時間の流れ、音の重なりなどに工夫を凝らす。	音の選択に理由が伴い、音の性質や組み合わせの妙を実感。「シャープペンのカチカチ音」「机をこする音」が音楽の構成要素として意識される。
第3・4時	音を持ち寄って協働で音楽をつくろう	小集団で自分の音を持ち寄り、仲間の音を尊重しながら即興的に音楽を構成。「定義」に立ち返りながら作品に題名をつける。	他者の音から着想を得、自分の音が生かされる経験を通して、音楽が共創によって豊かになることを実感する。
第5時	音楽として発表しよう	完成した作品をクラスで発表し、なぜこの作品が「音楽」なのかを語る。鑑賞者は感じたことを共有し、互いの作品を認め合う。	「音楽とは何か」について、自分なりの確信や疑問を深め、音楽の意味や価値について多様な視点で捉えるようになる。

第1時は「音楽の定義」について考えた。本時では、「音楽とは何か」「どのような条件がそろえば音は音楽になるのか」といった根源的な問いを通して、生徒が自らの音楽観を再構築することを目指した。

生徒の中には、これまでの鑑賞経験から「音楽＝物語や情景があるもの」「イメージ喚起が伴うもの」と捉えている者も多く、標題音楽的な枠組みにとらわれた理解が見受けられた。そこでまず、既習曲であるバッハ《フーガ ト短調》およびベートーヴェン《交響曲第5番 ハ短調》を取り上げ、標題や歌詞などの意味づけがなくとも構造的・形式的に音楽が成立していることを確認した。

その上で、以下の4曲を鑑賞教材として提示した。

- ・ピエール・ブレーズ：《ピアノソナタ第3番》
→ 断片的かつ予測困難な構造、非線形な展開をもつ現代音楽作品。
- ・廣瀬量平：《内なる怪魚シーラカンス》（前半部）
→ 音色と沈黙を巧みに交錯させた、日本的な現代音楽作品。
- ・坂本龍一：《async》より《disintegration》
→ ノイズ・環境音・電子音など多様な音を組み合わせた実験的作品。
- ・ジョン・ケージ：《Branches》
→ 植物を鳴らすという行為を通じて、偶然性と自然音の境界を問う作品。

これらはいずれも、既存の「音楽らしさ」や価値観（拍、小節、旋律美、明快な構造など）から逸脱し、「音」としての存在や構造への注目を促す教材である。作品を聴く中で、生徒は「音楽に拍子や旋律は必要か」「決まった形がなくても

音楽といえるのか」などの問いに直面した。

活動の終盤には、「音楽として成立するにはどのような条件が必要か」「音と音楽の違いは何か」といった問いを立て、それぞれが自らの「音楽の定義」を言語化する活動を行った。この過程は、シェーファーの『サウンド・エデュケーション』における「耳を澄ますこと」「音を意味づける力」を育む学習と重なり、音の再認識と自己表現の準備段階として重要な意味を持った。

図1の生徒は音楽の定義を「連続で音が鳴ったり、異なる高さの音が聞こえたりすると音楽になる。…音に変化があると音楽となる」と考えた。この生徒は、音の連続性や変化といった構造的側面に着目し、「雑音のみだと音、変化があれば音楽」と定義づけており、音楽を形づくる要素（テンポ、音色、高低）を明確に意識している。音同士の関係性に注目するこのような捉え方は、音楽の構造的な理解への入り口として重要な思考である。図2の生徒は音楽の定義を「その人が音楽ですと言ったら、そこに音があればそれは音楽になる」とした。この記述では、音楽の定義は主観的であるという立場が示されており、「生活音でも何でも、意識すれば音楽になる」といった受容美学的な視点が見えがえる。また、「楽譜が作れる」「始まりと終わりがある」「何度も再現できる」といった言葉から、音楽の形式性や構造化に対する理解も含まれている。これらの記述からは、単に音楽を「感情の表現」として捉えるのではなく、音の素材性・構造化・文脈性・主観性といった多様な観点から再定義しようとする姿勢が見られた。これは、シェーファーが『サウンド・エデュケーション』で提唱した「音に耳を傾ける力」や「音環境を意味づ

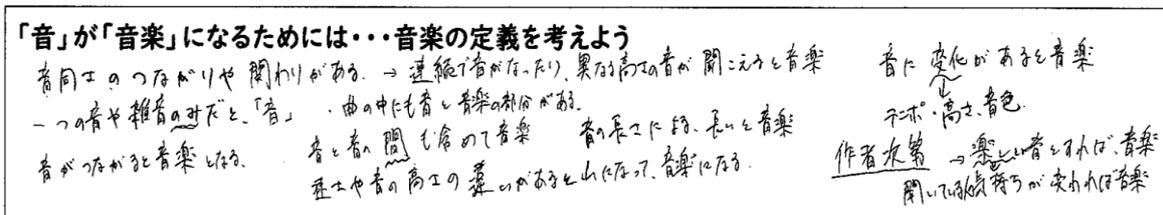


図1 生徒の考えた音楽の定義①

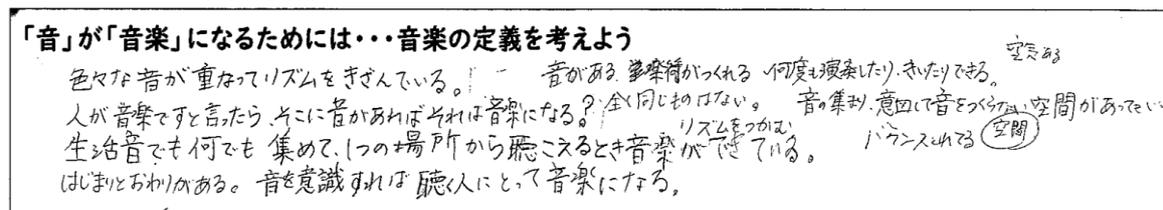


図2 生徒の考えた音楽の定義②

「音楽の定義」		理由		
① 音・リズム合せ ② はじめと終りがある		理由 ・ピエールがピアノの音の地面に当たった時、音が「かぶる」、音が閉じた ・音がつかない音が、「かぶる」がもたらすイメージ ・それは音が「かぶる」、ピエールは「かぶる」が「かぶる」		
担当者・楽器	はじめ	中	終	おわり
ピエール 袋	袋い入 ピエール	トントントントントントントントントントントントントントント		トント
ピエール 袋	ジャラジャラ (ピエール)	ジャラジャラ	ピエールでかく	
ピエール 袋	ジャラジャラ (ピエール)	ジャラジャラ	ピエールでかく	
ピエール 袋	ピエール 袋	カカカカ (ピエール)	ゴーン (ピエール)	カカカ (*)
ピエール 袋	ピエール 袋	ピエール 袋	ピエール 袋	ピエール 袋
ピエール 袋	ピエール 袋	ピエール 袋	ピエール 袋	ピエール 袋

図5 題名を考えるために記入したワークシートの一例②

第5時には写真1のように発表会を行い、題名の理由や聴衆がどのような感想をもったのか、共有した。



写真1 発表会の様子

「音楽に「正解」があると思っていたが、それが一番の間違いだった」

このような記述は、音楽を「再定義」する力の育成を示しており、シェーファーのいう“サウンドスケープ”の視点に近い音環境との向き合い方にも通じる。

② 他者との協働による価値の創造

第3・4時では「仲間の音を生かす」という条件のもと、小集団で一つの音楽作品を構成した。その中で、生徒は自らの音と他者の音との関係性に気付き、音楽が共同的・対話的に生成されるものであることを体験的に理解した。

「自分の音が仲間の作品に溶け込むことで、自信と達成感を感じた」

「他の人の音と自分の音が混ざること、自分一人では作れない音楽ができた」

これはOECDラーニングコンパスが掲げる「共創力 (Co-agency)」の視点に合致し、学びの社会的構成を促す実践となった。

また、「音や音楽への認識に変化はあったか」の自由記述分析からは、全体の57.1%が「変化があった」と答えており、単に知識や技能を得るだけでなく、音楽観そのものの変容が起こっていることが分かった。

③ 自己表現・自己受容へのまなざし

今回の創作活動は、「自分にとって音楽とは何か」という問いに対し、音によって自分を表現する機会となった。発表後の題名付けや振り返りでは、表現の意図を言語化することが求められ、自身の思考を深めるきっかけにもなった。

4. 成果と考察

本実践を通して、生徒たちの「音楽」に対する捉え方には顕著な変容が見られた。特に、以下の3つの観点から、その教育的意義と成果を整理できる。

① 音楽の定義を再構築する力

実践前、生徒の多くは「音楽とは楽譜があるもの」「旋律があるもの」といった従来の枠組みで捉えていた。しかし、本題材では、カーテンを開ける音や叫び声、笑い声、さらには電子機器の接触不良の雑音など、意図された「音」であれば音楽になり得るという気付きが多くの生徒に生まれた。音楽を「音の構造」「聴く人の意識」「意味づけ」によって再定義する姿勢が育まれたといえる。

「日常の音や偶然の音でも、“伝えたいこと”があれば立派な音楽になる」

「大きな音が出せなくても、工夫すれば“伝わる音”になる」
「ふだん話すのが苦手だけど、音で自分のことを伝えられ
てうれしかった」

これは音楽活動を通して「自分を理解する」「他者に理解
される」ことに喜びを見出す、いわば「音の自己表現と自己
受容」の姿勢が育っていることを示している。

5. まとめと今後の課題

本研究では、「音への気付き」を出発点とし、音楽の定義
を自ら問い直す創作活動を通じて、生徒が音楽の本質に迫る
学びを展開できる授業の在り方を模索した。既存の音楽観に
揺さぶりをかけるような実験音楽の鑑賞を導入することで、
「音」と「音楽」の境界に生徒自身が問いを立て、創作・協
働・振り返りを通して多面的な意味づけを行うプロセスが生
まれた。

このような実践は、音楽を“作品”として評価・模倣するだ
けでなく、「音楽とは何か」「なぜ人は音を用いて表現しよう
とするのか」といった根源的な問いに生徒が能動的に向き合
う契機となった。まさに、シェーファーの提唱する〈サウン
ド・エデュケーション〉の視点、すなわち“音に気付き、聴く
力を育て、意味を見出す力を養う音楽教育”を体現するもの
である。

また、小集団活動による協働的な創作では、他者の音への
まなざしが自らの表現を触発するという、学びの共創的側面
も明らかとなった。こうした関係性の中で育まれた「自己表
現」「自己受容」「他者理解」は、OECD ラーニングコンパス
が示す（変化の時代を生き抜く力）に通じる実践的なリテラ
シーであると捉えられる。

一方で、今後の課題としては以下の3点が挙げられる。

①評価の在り方の再構築

自由度の高い創作活動においては、作品そのものの完成度
ではなく、「学習のプロセス」や「音への意味づけ」「自己の
定義との関係性」など、より内面に向き合った視点での評価
が求められる。ルーブリックや振り返りの活用は有効である
が、今後はこれらを授業デザインと一体化させることが必要
である。

②時間確保とカリキュラム上の位置づけ

音素材の収集、創作、協働、発表、振り返りといった一連
の活動には時間的余裕が不可欠であり、既存の授業時数では
不十分な場面もあった。今後は総合的な学習や他教科との連

携など、カリキュラムマネジメントの工夫により、より柔軟
に時間を設ける必要がある。

③他題材・他領域への横展開

この実践で得られた「音への気付きから表現・協働・意味
づけへ至るプロセス」は、器楽や合唱、鑑賞といった他の領
域にも波及可能である。たとえば、合唱においても「音に込
められた意図をどう受け止め、どう届けるか」を自ら問うア
プローチが考えられる。さらには、「聴くこと」を起点とす
る学びが学校全体に浸透するよう、他教科との連携や学年を
超えた取り組みも視野に入れるべきである。

最後に、本実践を通して生徒が音に向き合い、世界を再解
釈する「まなざし」を獲得していったことは、音楽教育にお
ける一つの可能性を示唆している。創作とは、音楽をつくる
営みであると同時に、自分自身を見つめ、他者とつながる営
みでもある。今後も、生徒が日常の音に感性をひらき、そこ
から「音楽」や「意味」を創造していくような学びのデザイ
ンを追究していきたい。

（引用・参考文献）

- ・秋田喜代美 他（2020）「OECD Learning Compass
2030 仮訳
https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf（最終閲覧日：2026年1月6日）
- ・小川昌文 清水稔 他（2023）『よくわかる音楽教育学』ミ
ネルヴァ書房
- ・加藤徹也 山崎正彦（2018）『中学校 新学習指導要領 音
楽の授業づくり』明治図書
- ・木下和彦・中山由美（2023）「中学校音楽科での鑑賞活動
における越境による学び」『音楽教育学』第52巻第2号
pp. 1-4
- ・久保田慶一 他（1996）『はじめての音楽史-古代ギリシア
の音楽から日本の現代音楽まで』音楽之友社
- ・阪井恵（2011）「〈聴く〉とはどのようなことか—音楽教
育の実践に即して考える」『音楽教育実践ジャーナル』第
9巻第2号 pp. 66-73
- ・坂本龍一・福岡伸一（2023）『音楽と生命』集英社
- ・坂本龍一（2017）『async』commmmons

- ・清水稔 (2019) 「音楽科における《試行錯誤》に基づく創作指導の理念：「こと」と「もの」の関係性に着目して」博士論文 東京学芸大学
- ・シェーファー,R.M. (1992)『サウンド・エデュケーション』鳥越けい子他訳 春秋社
- ・文部科学省 (2017)『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編』学校図書